HTLV-Iウイルスの母子感染に関する研究
第3報：抗体陽性妊婦への感染経路について

武　弘道*，五十嵐久二*，外西寿彦**

要約：鹿児島市立病院で出産したＨＴＬＶ－Ｉ抗体陽性妊婦のうち承諾の得られた４９症例について家族の抗体検査をおこない，妊婦への感染経路について検討した。その結果，①夫→妻感染と考えられるもの７例（１４.３％），②母→子感染と考えられるもの３１例（６３.３％），③輸血による感染７例（１４.３％）など夫婦間および輸血による感染が予想より多くみられた。また，この調査を行う中で各種抗体検査法について検討したが，ＰＡ法のみ弱陽性で他の検査法では(−)又は(±)であっても家系からみれば明らかに陽性と判定される症例が数例あり，陽性例をすべて拾う目的ではＰＡ法が優れていると考えられた。

見出し語：ＨＴＬＶ－Ｉ抗体，夫婦間感染，ＰＡ法

対象と方法：昭和６２年９月より６３年１２月までの１６ヶ月間に鹿児島市立病院で出産した９２例のＡＴＬ抗体陽性妊婦のうち，承諾の得られた４９症例について家族の抗体検査をおこなった。ＨＴＬＶ－１抗体測定は，ゼラチン粒子凝集法（ＰＡ法－セロディアＡＴＬＡ）と酵素免疫反応法（ＥＩＡ法－エイテストＡＴＬ）を併用した。ＰＡでは定量法にて１６倍以上を示すものを陽性とし，ＥＩＡではnegative control＋0.06をcut off値として，cut off値以上を示すものを陽性とした。原則的にはＰＡとＥＩＡ両方が陽性を示すものを陽性者としたが，ＥＩＡ陰性でもＰＡ陽性，western−blot 法陽性で家族歴から考えて

＊ 鹿児島市立病院小児科
＊＊　同　産婦人科

陽性と考えられるものは陽性例に加えた。

結果と考察：

1. 妊婦への感染経路について

①夫→妻感染と考えられたもの７例（14.3%）

この群は全例が夫がはっきり抗体陽性で妊婦の母は(−)，輸血歴もなかった。結婚してから抗体陽性と診断されるまでの最短期症例は１１カ月であった。本症例は婚前性交時は必ずコンドームを使用していたので感染は結婚後と考えられた。

②母→子感染と考えられたもの３１例（63.3%）

夫が陰性で母(+)は２４例であったが，母が死亡していても家系調査の結果妊婦の姉妹が陽性であったりしたものはこの群に入れた。

③輸血による感染と考えられるもの７例（14.3%）

全例６単位以上の大量の輸血をうけていた。７例の輸血の適応は，心房中隔欠損症，先天性股関節脱臼手術，心臓弁置換術，腎血管周囲リンパ管切除術，帝王切開後出血，特発性血小板減少性紫斑病であった。当院で出産した妊婦で輸血を受けた例は他にもある筈であるが，大量の輸血をうけた症例のみがＨＴＬＶ－Ｉ抗体陽性になっているのは興味深い。

④妊婦の夫も母も抗体陽性のもの2例（4.1%）

鹿児島のような高浸淫地では陽性家系同志の結婚も考えられるが，１例は夫が弱陽性であり妻→夫感染も否定出来ないと考えられた。

今後の症例の増加を待って，より詳しい検討をおこないたい。

⑤家系の中で妊婦のみ陽性のもの２例（4.1%）

２例ともＰＡ法，ＥＩＡ法ともはっきり陽性を示した。夫および妊婦の母は陰性である。婚前交渉による感染は否定されなかった。

2. 各種抗体検査法の比較について

今回の調査中，ＰＡ法のみ陽性でＥＩＡ法は陰性，western blot 法でも(±)又は保留と出たが，家系的にみて陽性とした抗体が数例あった。典型的な症例を示すと，妊婦（Ｍ.Ｔ.）はＰＡ法１２８倍，ＥＩＡ法(−)，western blot法ではＰ１５(±)，Ｐ１９(++)，Ｐ２４(+)，Ｐ２８(−)，Ｐ５３(−)を示した。この妊婦の母親を調べるとＰＡ２５６倍，ＥＩＡ(+)，また妊婦の長男はＰＡ4,０９６倍，ＥＩＡ(+)を示し，この妊婦ははっきりＨＴＬＶ－Ｉウィルスを保有しているものと考えられた。

また，出生した児の抗体を月を追って追跡する過程でＥＩＡは早期に(−)となり，ＰＡのみ６～７ヶ月まで陽性を示すものがなかった。これらの結果より，陽性者をすべて拾いあげるという意味ではＰＡ法が最もすぐれているように思われた。

参考文献：

1）楠原浩一，武　弘道，高橋和郎，園田俊郎
鹿児島地方における小児のＨＴＬＶ－Ｉ抗体保有状況
日本小児科学会雑誌，９１巻　９号
２９８４－２９８８，１９８７

2）日高靖文，武　弘道，外西寿彦
鹿児島地方における妊婦のＨＴＬＶ－Ｉ抗体保有状況
日本小児科学会雑誌：投稿中（審査すみ）

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:鹿児島市立病院で出産したHTLV-1抗体陽性妊婦のうち承諾の得られた49症例について家族の抗体検査をおこない,妊婦への感染経路について検討した。その結果,①夫→妻感染と考えられるもの7例(14.3%),②母→子感染と考えられるもの31例(63.3%),③輸血による感染7例(14.3%)など夫婦間および輸血による感染が予想より多くみられた。また,この調査を行う中で各種抗体検査法について検討したが,PA 法のみ弱陽性で他の検査法では(-)又は(±)であっても家系からみれば明らかに陽性と判定される症例が数例あり.陽性例をすべて拾う目的ではPA法が優れていると考えられた。